郷土の特産品 活かした街へ 229

果物編

八朔が生まれた因島

ルーツを辿ると見えてくる 全国へ広がる流通の歴史①

私たちの郷土は温暖な気候に恵まれ、それに適した農作物が育ち収穫されている。尾道ではイチジク、ブドウ、ナシ、モモなどの果物やワケギ、アスパラガス、トマト、キャベツ、エンドウなどの野菜が生産されている。中でも柑橘のレモンは全国一の生産量を誇り、瀬戸内海沿岸では1898（明治31）年に和歌山からネーブルオレンジの苗木を求めた際、混入していたレモンの苗木3本を試植したのが始まりとも言われている。それよりも昔の1860（万延元）年に因島で誕生したのが八朔（ハッサク）で、そのルーツを辿るとこの果物が全国へ広がる流通の歴史が見えてくる。

（西亀 悟）

2月1日に営まれた八朔にちなむ法要

上の**写真**①は今年の2月1日、八朔誕生の地とされている因島の密厳浄土寺（田熊町1444、電0848・22・7021）で営まれた「八朔地蔵加持力法要」で、麻生紀雄住職が護摩炎に無病息災と八朔産業の発展を祈念している。

1556年、室町時代の弘治2年から470年を経て今日に至るこの寺が、八朔発祥の地といわれている由縁は江戸時代末頃に第十五世住職・小江恵徳上人が寺領で世に知られていない柑橘を発見し「八朔」と名付けたことによる。

八朔ゆかりの会の設立総会

左ページの**写真**⑤は寺の本殿広間に置かれた切り株で、当時発見された八朔の原木とされている。

八朔ゆかりの会設立

同②はこの法要から3年前の2022年10月13日、地元の有志が「八朔ゆかりの会」の設立総会を開いた時の写真である。

因島商工会議所の村上祐司会頭、JA尾道市の丹下和博代表理事組合長ら7人の設立メンバーによる互選で会長に就任した田中康貴氏（尾道市、大信産業㈱会長）は、この会の目的を次のように語っている。

> 因島の宝である八朔をこれから更に発展させていきたいと願い、この会を立ち上げました。
>
> 八朔は1860年にこの境内で発見されたと伝えられており、160年余の時を経る間に全国各地の皆さんに親しまれるようになりました。
>
> 八朔を発見し、その普及に努めて来られた先人の惜しみない努力が現在に繋がっていることに感謝。その歴史を辿っていると、八朔が因島の歴史を形成する中で重要な役割を担っていたことが分かりました。
>
> 今日まで八朔の生産を続けてくださった農家の方々の努力に思いを寄せ、八朔が繋いでくれた皆さんとのご縁を大切に、我々一同が一丸となって八朔産業並びに地域発展のための活動を続けて参ります」。

八朔ゆかりの境内に建立した像

八朔の原木

八朔地蔵加持力法要

写真④は田中会長の本家筋の8代目、田中清兵衛さんの銅像で、大正時代に営農技師として農家に八朔の栽培法を指導して生産力を高めた功績を讃える象徴として境内に建立された。

同③は「八朔発祥の地」の字が刻まれた石碑で銅像の横に置かれている。

下の**写真**⑥は八朔ゆかりの会が設立した日の記念写真で、上列右から2人目が麻生住職。**同**⑦は翌年2月1日に開催した「八朔地蔵加持力法要」の記念写真で、尾道の平谷祐宏市長（前列中央）が来賓として参列した。

八朔のルーツを探求

八朔ゆかりの会の設立メンバーには写真家の村上宏治さん（スタジオ村上アーカイブス代表）が監事として名を連ねている。

向島町出身の村上さんは郷土の歴史研究家として知られており、尾道市文化財保護委員、尾道ユネスコ協会事務局長などを務めている。

この会では八朔の歴史探究に努め、その内容を会のHP「ソレハ、因島田熊ノ八朔物語リ」の中で綴っている。

「未に残したい先人の軌跡」と題したページでは「八朔に関わる様々な歴史的資料や文献などを継続して収集。未だ明らかにされていないことなどは専門家に教えて頂きながら、考察・推測・取材を継続し、その過程で得た内容を皆さんに提供することで八朔の歴史の周知、八朔産業の発展に寄与したい」と記している。

八朔ゆかりの会 設立の記念写真

海外へ輸出された八朔

「郷土の特産品を活かした街へ 八朔が生まれた因島～ルーツを辿ると見えてくる 全国へ広がる流通の歴史」と題したこの連載は前述の資料や記者（筆者）が取材で見聞きしたことを織り交ぜながら進める予定で、その中には日本が明治維新と文明開化を迎え、貿易が活発になると多量の柑橘類を輸出していたこと。八朔の母は東南アジア原産のザボン、父は同じ地域で産出される九年母（くねんぼ）であること。そのほか、村上海賊が船に積んで各地に運んでいたこと…など、興味深い史実が含まれる。

政経パトロール

郷土の特産品 活かした街へ 233

果物編

八朔が生まれた因島

ルーツを辿ると見えてくる 全国へ広がる流通の歴史②

私たちの郷土は温暖な気候に恵まれ、それに適した農作物が育ち収穫されている。尾道ではイチジク、ブドウ、ナシ、モモなどの果物やワケギ、アスパラガス、トマト、キャベツ、エンドウなどがあるが、国内で最初に生まれ、世の中に広まった作物は少ない。数百年前、因島から東南アジア諸国へ向かった村上海賊が持ち帰った柑橘の種が八朔の起源となり、品種改良、栽培技術の向上で生産量を高め、全国各地へ出荷される特産品になっている。本編は先号（2月20日号）に次いで八朔のルーツを辿り、知られざる裏話を織り交ぜながら、その史実に迫りたい。

（西亀　悟）

①

八朔に関する文献を解説する村上宏治さん

②

密厳浄土寺の広間で講演会

③

八朔の名付け親となった15世住職

④

因島で実る八朔

上の**写真**①は2023年2月1日、八朔誕生の地とされる因島の密厳浄土寺（田熊町1444、電0845・22・7021）で営まれた「八朔地蔵加持力法要」で八朔に関する文献を並べており、その内容を八朔ゆかりの会（田中康貴会長）の監事、村上宏治さんが来訪者に説明している。

尾道市向島町の出身、写真家の村上さんはスタジオ「村上アーカイブス」の代表として郷土の「町並み＋想い出＋歴史的時間軸」をコンセプトに資料の収集を続け、その多くを著書、映像として残している。

写真②は当日の法要に参列した人が集まる広間で村上さんが八朔に関するエピソードを語っており、本編はそれを聴講した筆者（記者）自身の解釈を織り交ぜながら記している。

八朔の名付け親

因島のほぼ中央に風呂山と龍王山に挟まれてそびえる標高275mの山がある。

南側の麓に開山470年の密厳浄土寺と寺領があり、その一角に60種を超える名も無き雑柑が自生していた。

第15世住職・小江恵徳上人＝**写真**③がその中の一つをもぎとって口に含むと美味であり、付近の子供たちも遊びに来てはその実をおやつ代わりに食べていた。

1860年代を迎えたこの頃は、勝海舟が「咸臨丸」に乗り渡米して日米修好通商条約の批准書交換に携わり、江戸では井伊大老が暗殺される事件があった。また、因島が生誕の地である本因坊秀策が1862年にコレラによって病死する等の時代でもあった。

その頃はまだこの果物に名前らしいものがなく、恵徳上人が「八朔」と名付けたのは20数年後の1886年だった。

八朔の由来は諸説あるけれど、八朔の八は八月を表し、朔は陰暦の月の第一日を指している。

当時の旧暦8月1日（新暦の9月下旬）頃にその実を食べられるようになったことから八朔と称するようになった。

この時期は**写真**④のように表皮が青々として熟成に至っていないが、真夏に口に含むと酸味が利いたみずみずしい味が口内に広がり、その清涼感が疲労回復、夏バテの予防に重宝されていた。

八朔のルーツを辿る

前述の山の頂に立つと、因島の全域や島を囲む備後灘・燧灘の海域を見渡すことができる。

青影山と称するこの山の立地性に目を向けた村上海賊がここを拠点にして、元弘年間（1331―34年）から慶長元年（1596年）までの260年余の時を刻み、この間に築城した青影城の本丸跡や屋敷跡などの遺構が残されている。

村上海賊は500年以上前から海外との交流を重ねていた。中国大陸・朝鮮半島・フィリピン・ジャワなどと交易し、彼らを運んだ船内には食料となる柑橘類が積み込まれていた。

⑤

八朔を生んだ両親

船乗りにとって柑橘は水と食料同様に大切なものだった。彼らの健康を保つものに「ビタミン」があり、それが不足すると壊血病を患い命を落すと怖れられていた。

その予防にビタミンが有効であるとは知られていなかったが、行く先々で柑橘を船積みし食し、因島に戻ってからも残りを食べて、その種をばらまいたのが八朔誕生のルーツと言われている。

それを辿ると、青影山の麓に自生していた柑橘が近年のDNAゲノム解析で「九年母」（くねんぼ）と「ザボン」であると分かり、原産地が彼らが交易で向かった東南アジアであると判明した。

八朔の〝両親〟を解明

ゲノムは遺伝子の集合体を指し、DNAは遺伝子の本体となる物質で、八朔をはじめとしたゲノム解析によって種子親がザボン（母）と、花粉親が九年母（父）であることが分かった。

九年母の誕生地は鹿児島・長崎・沖縄などの説があるが、いずれも1700年代が起源とされている。

一方で、村上海賊が東南アジアから最初の柑橘を持ち帰ったのは1500年代で、その中に九年母があったとの記録が古文書にあり、同じく青影山の麓に自生していたザボンも東南アジアに由来していることから、この2種の柑橘を親とする八朔は因島がルーツとされている。

特産品になる過程

本編は八朔の起源を辿り、それは数百年前に遡ると記してきたが、この果物が因島の特産品になり、全国へ流通するまでには地元の人が品種改良を重ね、栽培に精力を傾けたことには触れていない。

次回はその中心的な役を担った人たちにフォーカスし、八朔が世の中に広まる過程をリポートする。

※参照文献と**写真**③⑤の引用元＝「八朔ゆかりの会」、「日本遺産のポータルサイト・芸予諸島」の関連HPなど。

法人の大口買取り歓迎　空き家一軒丸ごと買取りも
古いモノ、買取ります。
受け付け年中無休
・店頭買取り
・出張買取り
・無料お見積り
スローハンドデパートメント
価値のわからないモノもお気軽ご相談下さい
☎0120・663・471
神辺店：福山市神辺町湯野176-2
営業日（金）（土）（日）（月）11:00~18:00
戸手店：福山市新市町戸手2410-28
平日10:00～16:00不定休
☎0847・54・2240
骨董品・茶道具・アンティーク家具・ビンテージ玩具・古い什器などお取り扱いいたします。

政経パトロール

郷土の特産品 活かした街へ 234

果物編

八朔が生まれた因島

ルーツを辿ると見えてくる 全国へ広がる流通の歴史③

この連載のタイトル「八朔が生まれた因島」の八朔は、漢字で表すと少し硬い感じがする。「はっさく」とひらがなで書くと柔らかい感覚で「ハッサク」とカタカナで書くとフルーティーな雰囲気が漂う。また、この果実を流通の中の一つの商品として捉えるか、あるいはビタミンなどの栄養を含んだ薬膳としての果実と捉えるか…、いろんな切り口でこの連載を編んでいる。その過程で一貫しているのはサブタイルに掲げた「ルーツを辿ると見えてくる～全国に広がる流通の歴史」に迫ることで、前号に続く本編は地元の人が栽培に精力を傾け、八朔を世の中に広めた経緯をリポートする。

（西亀　悟）

①

明治時代に東京の千疋屋が作った包装紙

②

八朔ゆかりの会の田中康貴会長

③

密厳浄土寺の境内にある「八朔発祥の地」の記念碑

④

記念碑の横にある田中清兵衛之銅像と八朔ゆかりの会の田中康貴会長

明治から大正時代にかけて因島は将来有望と思われる八朔を含め柑橘の栽培を積極的に進めていた。

田熊村東組青年会に所属する人たちも山々を開墾してその産地づくりに励んでいたが、公的な奨励策もない中で暗中模索、手探りでその営みを続けていた。

そこに「希望の光が射し込んだ」と伝えられている。

明治41（1908）年に広島県立西条農学校が開校し、その第一期卒業生に田熊出身の田中清兵衛の姿があった。

彼は1700年代、初代の田中奎三郎から続く家系の8代目で、柑橘農業の未来を切り拓いた人である。

卒業後、郷里に戻った田中清兵衛は新鋭の技術指導者として産地拡充の先頭を切り、柑橘農業の発展に情熱を傾けた。

母校の後輩たちへは伝来の畑を実習の場として提供し、彼らと共に暮らし、共に働きながら最先端の農業技術への挑戦、試行錯誤を重ねる中で要する食費、生活費などは田中家が賄っていた。

西条農学校に入学する学生の多くは全国各地の大規模農園の子息だった。

卒業すると故郷の農園に帰る人、あるいは大学に進学して研究者となり後に母校の教壇に立つ人、全国へと旅立ち日本の柑橘産業のパイオニアになった人たちが巣立っている。

八朔の販路拡大へ

大正14（1925）年秋、田熊に出荷組合が設立された。村農会の技師を務めていた清兵衛の指導のもと組合長・岡野左太郎、副組合長・村上寿一両氏を先達に八朔をはじめとした柑橘の販路拡大が図られた。

後に因島市農業協同組合長になった田中清兵衛はその頃の営みを回顧録に次のように記している（要約）

【記者・注】文中にある「千疋屋」（せんびきや）は江戸時代後期の天保5（1834）年に武蔵の国（現在の埼玉県越谷市）に開いていた槍術の道場主が生計を安定させるために郷土の農作物を日本橋人形町（現在の葺屋）に船便で運んで売り捌いたのが起源。明治元（1867）年、欧米諸国の文化などを取り入れる当時の世相に沿って果物食堂を構えたのが、現在各地に点在するフルーツパーラーの先駆けとなり、清兵衛氏らがこの店へ八朔を売り込む経緯を綴っている箇所が興味深い。

田中清兵衛の回顧録

私は農業技術員として村農会に入り田熊に柑橘の出荷組合を作った。

八朔の販路が早く広がったのは尾道、福山であり、これに次いで笠岡へと広がった。

昭和三年に中国、四国農産物共進会があったので、八朔を持参して宣伝に努力し、引き続いて昭和四年に岡山で博覧会が開催されたのを機にこの地域へも出荷先を増やすことができた。

そして大正十四（一九二五）年から八朔果実を東京および大阪に持参して宣伝に努めた。

特に東京を目指したのは大阪では既に真価を認められ、割合によく出荷されていたからである。

その頃の八朔は十貫に対してネーブルオレンヂよりも一円安位の値段で取引されていた。

東京では千疋屋へ持参して店主に八朔を見せたところ「これは面白い」という事になり、色々話した末「八朔と書いたのでは売れないこちらに任せろ」という事になった。

店主は早速店頭に宣伝文句をなした看板を掲げ、それには「広島名産ハツサクオレンヂ」と書かれていた。

当時、地元の広島では上物で一個八～一〇銭であったのを、この店で五〇銭の値を付けたのには驚いたが、飛ぶように売れたのである。

店内ではコーヒーを飲みに入った客へハツサクオレンヂを二袋宣伝用として別の皿に付けたところ、客は帰りに何個かを土産に買い求めた。

商人の宣伝というものは実に恐ろしいものであるとつくづく考えさせられ、翌年には千疋屋が希望する宣伝文句を入れた包装袋を用意した。

今日のように八朔の流通量が増えたのはその味覚が広く受け入れられたのに加え、宣伝に大いに努めたという苦心が実を結んでいると考える。

※**写真**①は千疋屋の指示を受けて作った包装紙で「皆様の御健康の為に田熊特産ハッサクオレンヂを召し上がり下さい」の文を添えている。

先人達の努力に感謝

清兵衛の親戚筋となる田中康貴さん（大信産業㈱会長）＝**写真**②は、2022年に「八朔ゆかりの会」（田中康貴会長）を設立。「八朔を世に知らしめた先人達の努力と生産を続けてくださった農家の方々の努力に感謝し、八朔が繋いでくれたご縁を大切に、八朔産業並びに地域発展のため活動を続けて参ります」と主旨を語っている。

密厳浄土寺（因島田熊町）の境内には「八朔発祥の地」と大書した石碑＝同③と「田中清兵衛之銅像」＝**写真**④が建立されている。

つづく

※**参照文献**＝「八朔ゆかりの会」▽千疋屋（東京）の関連HPなど。

JA墓石取扱店
墓地、墓石のことは何でもご相談ください。
数多くの実績はホームページでご覧ください。石のオカダ で検索
箕島霊園　大好評分譲中!!
岡田石材グループ　建設業広島県知事許可　般-第26862号
㈲石のオカダ
福山市新涯町5丁目4-39
☎(084)953-3224　0120-84-1113

JA福山市ご指定
（病院⇔自宅）
24時間営業
寝台車のご用命は
各宗派の葬儀／祝花／生花／慶弔花輪
㈲ミヤオク葬祭
本社 明神ホール
福山市明神町1丁目6-10
☎(084)931-1262 FAX 931-1340

各種会席料理・オードブル・折詰弁当
幕の内弁当・出張パーティetc
まごころの仕出し
㈱伊三郎
福山市南本庄町3-8-12
☎(084)927-0168

果物編

郷土の特産品 活かした街へ 235

八朔が生まれた因島

ルーツを辿ると見えてくる 全国へ広がる流通の歴史④

この連載の1回目（2月20日号）は八朔発祥の地が因島の密厳浄土寺（麻生紀雄住職）の寺領とされていること。2回目にその起源が数百年前、村上海賊が東南アジアの国から持ち帰った柑橘に由来すること。3回目は八朔の産地拡充に尽力した人々の営みを綴ってきた。そして、この回は現代の人々が八朔の「持ち味」をどのように捉えているかに着目。ゼリー状に加工されたり、大福もちになったりと、昔の人が想像だにしなかった姿形をしているものがある。そのほかケーキやクッキー、アイスクリームに用いられるなどスイーツ、デザートの体裁をなしているものがあり、その幾つかを筆者（記者）が口に含むと、味わい深いものが多かった。（西亀 悟）

2月1日に密厳浄土寺で開かれた法要

上の**写真**①は因島の密厳浄土寺（田熊町）で営まれた「八朔地蔵加持力法要」で、麻生紀雄住職が護摩炎に無病息災と八朔産業の発展を祈念している。

2023年から2月1日に開催している法要には八朔ゆかりの会（田中康貴会長）の呼び掛けもあって多くの人が訪れる。

ユニークなのは**同**②の「はっさくん」で、「水軍と花とフルーツの島」のキャラクターとして島内外のイベントに出掛けている。

水軍まつりでは兜を装うこともあるようだが、この日は頭に八朔の葉を生やしてるのが愛らしく、会場の雰囲気を和ませていた。

また、法要を取材している記者にも振る舞われた「八朔うどん」＝**同**③は、輪切りにした果肉から漂う香ばしい匂い、酸味のあるつゆが麺と快くマッチして食欲をそそる。

多様な八朔の加工品

八朔には程よい甘みと酸味、爽快な香りがあり、その特色を活かした加工品が増えている。

たとえば「はっさくゼリー」は**写真**④の様に包装された商品を土産品屋や食品スーパーの売り場で目にする。

店内だけでなく通販サイトや県内の特産品を集めてアピールする「ひろしま夢ぷらざ」でお馴染みになっており、広島空港の「JALPLAZA」でも土産品として売られている。

尾道では海の幸、山の幸が豊富な郷土の食材を活かした食文化を守り育てようと、関係機関が「尾道スローフードまちづくり推進協議会」（事務局・尾道市農林水産課内、電0848・38・9212）を発足して様々な活動を展開している。

その一つ「おやつコンテスト」は毎年テーマを決めてレシピを募っている。

2022年は「因島発祥！はっさく×尾道」のキャッチフレーズで、その味と食感に出品者の独自性が感じられることが入賞へのポイントになった。

18点の応募から八朔ゆかりの会会長、びんご6次産業化アドバイザー、百貨店食品バイヤーらによる試食審査を経てグランプリに輝いたのは「八朔と桜あんのパイ」（谷原菓子店作）、準グランプリに「もっとはっさくピザ」（ピザカフェつばさ作）＝**同**⑤、「ウィークエンド・アグリューム」（10月のさくら作）、八朔ゆかりの会会長賞「おのみち柑橘畑のはっさくカードチーズケーキ」（ファームデザインズキッズ作）等が選ばれた。

④ 因島の八朔ゼリー

③ 特製の八朔うどん

② 法要に訪れたはっさくん

⑤ ピザにも合う八朔

⑥ 八朔とシロギスの料理

料理に映える八朔の味

八朔への関心、注目度は各方面で高まっているようだ。

2024年5月には福山大学の海洋生物科学科の研究室が養殖に成功したシロギスとハッサクの特色を調和して開発した料理の試食会があり、**写真**⑥は卓上に並べられた八朔とシロギスを用いた料理。

2015年から同大附属の沿岸資源培養研究室（因島キャンパス）の教授らがシロギス養殖の研究を進め、天然の環境で育つ期間の3分の1で身太りのよい成魚に育てることに成功した。

そのシロギスの炙りに八朔をトッピングした寿司や果肉をくり抜いた八朔の皮を器にしてチラシ寿司を詰めた料理を八朔ゆかりの会の会長や平谷祐宏尾道市長らが試食し、好評だったことから地元の寿司チェーンがメニューに加えるなど、一昔前には考えが及ばなかったところに八朔の裾野が広がっている。

広島は柑橘の宝庫

気候温暖、適度な降雨がある広島県は多様な柑橘類が育つ環境にある。

下の**表**⑦は広島県果実農業協同組合連合会（本所・東広島市）がまとめた県内における柑橘類の販売数量を示している。

2022年度の実績で最も多いのが早生温州の2217t。次いで八朔が1465t、レモンが1413tの順で、尾道では栽培面積が広く郷土の特産品として名高いレモンよりも八朔が多くなっている。

この連載を通じて筆者が感じたのは、数百年前にこの地に芽生えた八朔を、現代においてもその実を口に含むことが出来る幸運で、これからの遠い将来へこの果実を残してゆけるかは、現代の私たちの営みに掛かっている。※**写真**②は亀田年保氏のXから転載。

広島県の柑橘販売量(t)	
種別	2021年度
極早生温州	599
早生温州	2.217
いしじ	1.131
普通温州	944
八朔	1.465
ネーブル	481
しらぬい	928
レモン	1.413
その他	2.037
柑橘類合計	11.215

⑦ 広島県内の柑橘出荷量

法人の大口買取り歓迎 空き家一軒丸ごと買取りも
・店頭買取り
・出張買取り
・無料お見積り
古いモノ、買取ります。
受け付け年中無休
スローハンドデパートメント
価値のわからないモノもお気軽ご相談下さい
☎0120・663・471
神辺店：福山市神辺町湯野 176-2
営業日（金）（土）（日）（月）11:00～18:00
戸手店：福山市新市町戸手 2410-28
平日 10:00～16:00 不定休
☎0847・54・2240
骨董品・茶道具・アンティーク家具・ビンテージ玩具・古い什器などお取り扱いいたします。